

第 1 章

復興と文化と観光

生活と文化，文化と観光は，切っても切れない深い関係にある。それゆえに，復興において生活の復興を目指す時には，その基盤である文化を創造し，その手段である観光を活用することが欠かせない。そこで，ここでは復興と文化の関わりを考察しつつ，文化を軸にした観光の復興に果たす役割を明らかにする。

1. 復興の使命と課題

復興と文化や観光との関わりを述べる前に，復興の特質や課題を明らかにしておきたい。

(1) 災害の特質

ここでは，災害からの復興を考えているので，まず災害の特質について触れておきたい。第1の特質は，破壊や喪失をもたらす残酷で非情なものだということである。生命はいうまでもなく，家庭や地域を破壊し，生活や仕事を奪う。さらには，歴史や文化まで奪ってしまう。家族や地域の様々な関係性も失われる。希望や自尊心も含め，ありとあらゆるものが奪われてしまう。生きてゆくうえで欠かせない，生活，生命，生業，生態という「4つの生」と，自由，自立，自尊，自治という「4つの自」が失われる。不条理な悲しみや苦しみが押し付けられる残酷なものである。

第2の特質は，その時代の社会が持っている歪みを顕在化するものだということである。高齢化や過疎化による歪みが堰を切ったように噴出する。経済優先社会の問題，技術過信文明の問題，一極集中構造の問題なども表面に出てくる。人口減少に悩む地域ではその現象が加速し，農業衰退にある地域ではその

傾向が加速する。東日本大震災の東北沿岸の集落ではどんどん人口が減少しているし、漁業という経済基盤もどんどん弱くなっていつている。人間と自然の関わりだとか、人間と人間の関わりだとかを、問いかける。

(2) 復興の使命

「復興」とは何か。手元にある辞書を引いてみると、「一度衰えたものが、再び盛んになること」(大辞林)とある。その衰えの原因を考えると、地震のような急激な破壊もあれば、コミュニティ崩壊のような緩慢な破壊もある。災害や事故などは急激な破壊に属するが、温暖化や過疎化などは緩慢な破壊に属する。この破壊による損失を回復し、破壊から立ち上がることが復興である。回復と自立がここでのキーワードである。

復興の定義での「再び盛んになる」ということについても、言及しておこう。ここでは、「盛んになる」という運動的規定に着目しなければならない。盛んになるということは、新しい生命力を獲得することであり、未来を切り開くエネルギーを取り戻すことである。となると、復興の英訳としては Reconstruction よりも Revitalization の方が的確なように思う。新しい息吹をどう吹き込み、変革の力をどう育むのかが、復興では問われる。2015年に仙台で行なわれた国連の防災会議で提起された「Build Back Better」も変革を企図したもので、もとに戻すのではなく、より良くすることを求めている。より良くするといっても量的に大きくなることを求めているのではなく、質的に進化することを求めていることに留意したい。変革と進歩がここでのキーワードである。

この変革と進歩の立場に立つならば、元通りの危険な状態に戻してはいけな。悲惨な苦しみを2度と繰り返してはならないからである。災害の社会的な要因を取り除き、減災のための措置を充実させて、安全で安心な社会にすることが求められる。暴飲暴食的な社会体質を変えることが、ここでは大きな課題となる。ライフスタイルの見直し、自然との関わりを見直し、コミュニティのあり方を見直しなどが、安全面から求められる。安心と減災がここでのキーワードである。

(3) 復興の課題

復興では、世直しと立て直しが求められる。世直しでは、社会の歪みを正すことが求められ、立て直しでは、失ったものを取り戻すことが求められる。前者は「改革的な取り組み」、後者は「回復的な取り組み」といってよい。

改革的な取り組みでは、災害で明らかになった社会の歪みと向き合うことが求められる。阪神・淡路大震災では高齢社会の福祉欠落の問題が、中越地震では中山間地の限界集落の問題が、東日本大震災では地方都市の経済格差の問題といった、社会的な歪みが顕在化した。これらの震災で明らかになった社会的な歪みや矛盾の解決をはかることが、復興では求められる。こうした矛盾の解決をはかって、未来の理想社会の創造につなげることが、改革復興あるいは創造復興である。

こうした社会の歪みは、災害が起きて初めて気付くというものではない。社会の歪みは、緩慢な破壊として災害前から存在するもので、冷静に洞察する目があれば、平常時においても気付く。とすれば、災害後にその解消をはかるのではなく、災害前からその解消に努めるべきものである。脆弱なコミュニティの解消をはかること、安全軽視のライフスタイルを改善することなど、災害前から歪みの是正に努めることが必要である。これらの事前の取り組みは、公衆衛生的な備えや事前の復興事業に通じる。

回復的な取り組みでは、人間らしい暮らしや活気のある社会を取り戻すことが課題となる。先に述べた「4つの生」と「4つの自」の回復が求められる。

4つの生の回復では、「医、職、食、住、育、連、治」という7要素を包括的に獲得することが欠かせない。「医」は、医療や福祉の充実をはかって心身の健康を取り戻すことをいう。「職」は、職業や雇用を生み出して、生きがいとなる仕事を取り戻すことをいう。「食」は、栄養に留意しつつ、健康の維持につながるよう食生活を営むことをいう。「住」は、住宅を健康で安全な生活拠点として、安心できる住まいと暮らしを取り戻すことをいう。「育」は、保育や教育の場の確保と充実をはかり、子どもたちが成長できる環境を取り戻すことをいう。「連」は、人と人のつながり、自然と人のつながり、歴史と人のつながりを取り戻すことをいう。コミュニティの再生を目指すことも含まれる。「治」は、地域のガ

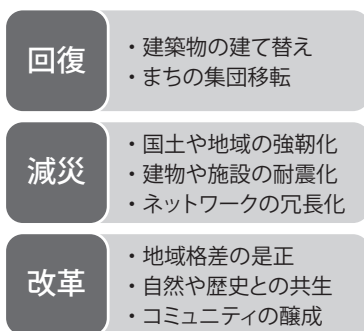


図1-1 復興における3つの取り組み

バランスで自治や自律を取り戻すことをいう。

4つの自の回復では、被災地の個性を尊重すること、被災者の人権を尊重することが大切である。居住地選択や住宅再建の自由が認められていること、復興まちづくりでは地域コミュニティの自治が認められていること、住宅や仕事を取り戻して自立をはかること、生きがいやつながりを取り戻して自尊を回復することが課題になる。なお、自尊を回復するうえでは、地域文化の復興の果たす役割が大きい。地域の個性を尊重するというのも、自治や自尊と密接に関わっている。

災害からの復興では、災害に強い地域をつくるのが、何よりも優先すべき課題となる。回復的な取り組み、改革的な取り組みに加えて、減災的な取り組みがあるということである（図1-1）。

この減災的な取り組みでは、ハードウェア、ソフトウェア、ヒューマンウェアの足し算をはかることが求められる。ハードだけに固執せず、ソフトにも力を入れ、コミュニティづくりや情報システムの整備を心がけなければならない。それ以上に大切なのがヒューマンウェアで、市民意識の向上や生活習慣の改善を心がけなければならない。この意識や習慣は、歴史的に形成される生活文化と密接に関わっており、地域の祭事や伝承とのリンクをはかる必要もある。

安全性は生きてゆくうえでの必要条件であっても十分条件ではない。安全性の確保を最優先にしつつも、利便性や快適性も同時に追求しなければならない。

アメニティがあってコミュニティがあってサステナビリティがあれば、結果としてセキュリティがついてくるという「アメコミセキュリティ」の考え方を、ここでは大切にしたい。まさにそれは、地域密着型で持続共生型の文化を育むことに通じる。

2. 復興と文化

文化を中心にして復興と観光は深く結びついている。そこで、復興と文化の関連性を論じたうえで、観光が復興に果たす役割を論じることにする。

(1) 文化の役割

ここでいう「文化」とは、社会が地域に根差して蓄積し共有してきた、人間の生存と社会の紐帯の基盤である、有形あるいは無形の「様式、技能、慣習、知恵」などをさす。災害に関わっては、「災害文化」(Disaster Subculture)という言葉がある。災害の経験の中で生まれ育まれてきた、防災や減災に関する知恵や技能などの集積を災害文化という。この災害文化は、とりわけ生活の中や地域の中で醸成され伝播されている。

この災害文化は、大きく属性、行事、資源に区分して捉えることができる。属性として見た時には、芸術、科学、宗教、制度などとして、それは蓄積されている。行事として見た時には、風習、祭礼、技芸、規範などとして、それは機能している。資源として見た時には、文化財、文化景観、工芸品などとして、それは存在している。

こうした文化や文化的資源が、減災的な役割と効果を、それぞれ人間に対しても、地域に対しても果たす。人間に対しては、心の拠りどころとなり、精神的な安らぎを与える。生きてゆく希望にもつながる。地域に対しては、共同体としての絆を育み、地域への愛着や誇りを生む。災害や復興において、文化は無くってはならないものである。

(2) 災害と文化

それでは、文化と災害との関連を具体的に見てみよう。災害と文化は、相互規定の関係にある。文化は被災の対象でもあり、減災の手段でもある。

災害により、文化は破壊される。大規模な地震や火山の噴火、あるいは津波や豪雨などの自然災害で、文化や文明が失われている。マヤ文明やエゲ文明、イースター島文明などは、疫病や環境破壊によって失われている。諸説があり定かではないが、マヤ文明は干ばつにより、エゲ文明は飢餓や疫病により、イースター島文明は森林破壊により滅亡したといわれている。ベスビオ火山の噴火によるポンペイの消滅もある。日本でも、阪神・淡路大震災や東日本大震災で、文化財や文化的景観が少なからず破壊されている。

自然災害や環境破壊だけでなく、戦争や紛争による破壊もある。戦禍や爆撃により歴史的資産が破壊されてしまう。ナチスドイツによるワルシャワの歴史地区の破壊、アフガン戦争でのタリバンのパーミアン遺跡の破壊などがその代表例である。イスラム過激派の文化遺産の破壊もある。ナチスは、他民族の血を絶やすために、アウシュビッツに送り込んで人命を奪うだけでなく、歴史的文化の破壊にも力を入れている。このことは逆説的に、人命とともに文化が、民族が生存するうえで欠かせないことを教えている。

文化は災害により破壊される一方で、文化は災害から生命や生活を守る役割を果たしている。減災の知恵や技能が文化として、生活の中や地域の中に溶け込んで継承されてゆくと、災害体験は風化せず、次の災害による被害を軽減する役割を果たす。

京都の古いまち並みを見ると、屋根の勾配や高さを統一する、隣家との間にうだつを入れる、2階部分は漆喰壁にしてうだつを上げる、背割りには蔵を立ち並べるといった防災の知恵が共有され、それが秩序あるまち並み景観を作り出している。そうした秩序や文化的景観が、大火を防ぐ役割を果たす。同様のまち並みの秩序はロンドン大火の後の復興でも取り入れられ、大火の防止に役立っている。

防災の知恵としての文化は、まち並みなどのハードにとどまらない。祭礼のための共同事業やおすそ分けなどの生活慣習としても根付いている。京都の一

部の地域では、風の強い日にはサンマを焼かないといった風習が、今なお生きている。

(3) 復興と文化

復興と文化の間にも、相互規定の関係が成り立っている。文化は復興を促し、復興は文化を創造するという関係が成り立っている。

復興の駆動力としての文化を見ると、結や講といった地域の結びつきが復興の絆として機能している。神楽や獅子舞といった地域のお祭りが復興への勇気を与える。音楽や絵画は被災者を慰め癒す働きをする。地域のお祭りの復活が地域の復興の推進力となっている。後述するように、文化が復活すると地域の吸引力が生まれ、観光につながると賑わいや経済の発展にもつながる。

復興の創造物としての文化を見ると、阪神・淡路大震災では「幸せ運べるように」などの復興支援ソングが、東日本大震災では「花は咲く」などの復興支援ソングが生まれている。震災を題材にした小説や歌集も数多くつくられている。阪神・淡路大震災では、村上春樹の「神の子どもたちはみな踊る」、東日本大震災では、池澤夏樹の「双頭の船」といった小説が生み出されている。鴨長明の「方丈記」は、1177年の安元の大火などを題材にした文学作品である。また、復興の創造物として、新しい思潮を挙げることができる。1755年のリスボン地震は、ポルテールやルソーなどによる啓蒙思想を生み、フランス革命にまでつながっていく。1854年の安政地震は、吉田松陰や西郷隆盛などによる討幕思想に少なからず影響をあたえ、明治維新にまでつながってゆく。

この文化の創造ということでは、祇園祭の誕生の経緯に触れざるを得ない。祇園祭は大量の死者が出る疫病を収めようとして869年に始まっている。天明の大火や禁門の変による大火などの災害を何度も受けながらも、祇園祭が復活してまちの復興を後押ししている。復興が文化を生み、その文化が復興を後押しするという関係が確認できる。

3. 復興のバネとエンジン

文化が復興を推し進めるということに関わって、復興の推進力としてのバネとエンジンについて言及しておきたい。その推進力は、復興バネとか復興エンジンとか呼ばれる。推進力を精神面から考えたのがバネで、機能面から考えたのがエンジンである。

(1) 復興のバネ

「災害ユートピアの成立と崩壊」という復興過程の運動論がある。災害直後には、お互いに助けあおうとする力が働き、被災者が一体となるユートピアが現出するが、復興が進むにつれて、被災者間に格差や対立が生まれ、加えて様々な復興の障害が立ちはだかって、多くの被災者は「2番底」とも言われる奈落の底に再び突き落とされる。しかし、その後に復興バネが働いて、被災地と被災者はその奈落の底から這いあがることができる。

精神的作用としてこの役割を果たす復興バネには、気概のバネ、共感のバネ、反省のバネ、希望のバネがある。「気概のバネ」は、逆境に負けず立ち上がろうとする反骨心をいう。「なにくそ」という負けじ魂である。この気概のバネには、被災者の自立を促し、勇気を引き出すことが求められる。「共感のバネ」は、お互いの気持ちを理解し合い助け合おうとする連帯感をいう。ここでは、コミュニティケアやボランティアケアが求められる。「反省のバネ」は、災害につながった過ちを正そうとする姿勢をいう。被災の原因を正しく捉え、自省してその改善をはかることが求められる。「希望のバネ」は、復興の正しい方向を指し示すビジョンや目標像をいう。みんなで夢とリアリティのある構想や計画をつくる必要がある。

この復興のバネの中で、新しい質を獲得して創造や改革につなげる役割を果たすのが、反省のバネと希望のバネである。この2つのバネは、復興の目指すべき方向を示し、復興の羅針盤となるからである。まず、反省のバネについて触れておきたい。すでに述べたことであるが、災害は、一極集中の国土構造、

自然環境の乱開発、行き過ぎた核家族化などの問題を、私たちに突きつける。そうした歪みに向き合ってその克服をはかることが、復興には求められる。

歪みに向き合う時には、なぜそうした歪みが生まれたかの自省的な視点がいる。自省的に捉えることによって、今までの価値観が変わり、生き方が変わってくる。被災の原因の究明なくして、反省のバネはなく、新しい質の獲得もない。経済優先で安全軽視の風潮、利己的で排他的な発想、自然と共生する姿勢の欠落など、人為的あるいは社会的さらには技術的な原因に鋭くメスを入れる必要がある。歴史的文化の継承への姿勢の弱さも反省しなければならない。

次に、希望のバネについて触れておきたい。復興の遅れや混乱は、復興で目指すべき方向がすぐには定まらなかったこと、あるいは拙速に方向性を決めてしまったことに起因している。目指すべき社会の方向を事前にしっかり議論しておけば、復興の目標像の合意が災害後に速やかに取れ、かつ多角的な検討を踏まえて適切な方向を見出すことができたと思う。速やかで理想的な復興のためには、復興の方向を指し示す希望のバネとしてのビジョンを事前に検討しておくことが欠かせない。

希望のバネは、第1に被災地の心を1つにするために、第2に復興の方向を正しく捉えるために、必要である。心を1つにするためには、時間をかけて被災者みんなで、日頃からしっかり議論を積み重ね、目指すべき社会像を共有しておかなければならない。また、復興の方向を正しく捉えるためには、社会が抱える問題点を深く考察し、時代の流れや世界の動向にも目を向けつつ、目指すべき地域像を明らかにしておかなければならない。

(2) 復興のエンジン

バネは精神的側面から見たものであるが、機能的側面から見たものがエンジンである。このエンジンとして、精神的エンジン、経済的エンジン、教育的エンジンの3つがある(図1-2)。

「精神的エンジン」は、生きる勇気や誇りあるいは連帯感を取り戻す機能をいう。先に述べた復興のバネが地域の中で働いた時に機能する。「経済的エンジン」は、生きてゆくための経済や、地域の活力を引き出す経済の基盤があるときに

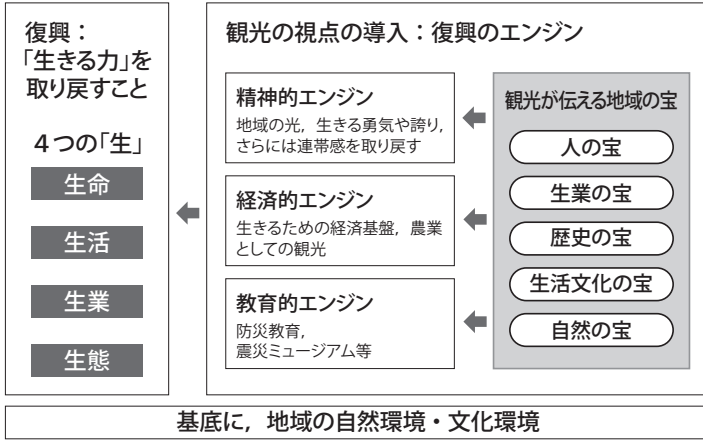


図1-2 復興のエンジンと観光が伝える地域の宝

出典：室崎（2015）を参考に作成。

機能する。コミュニティビジネスを含む地域の経済の活性化によりもたらされる。この地域の経済の活性化に、観光が果たす役割は極めて大きい。「教育的エンジン」は、災害体験を伝承し、未来を担う人材を育成する機能である。災害伝承施設、災害ミュージアム、語り部などが、その力を与えてくれる。

これらのエンジンを駆動させるには「ガソリン」としての地域資源がある。豊かな自然や学びのある歴史が欠かせないし、生活や生業を通して感じられる刺激もある。そして何よりも、魅力ある人が息づいていることが求められる。「人の宝」「生業の宝」「歴史の宝」「生活文化の宝」「自然の宝」がいるということである。それらの地域の宝というべき資源は、双方向あるいは相互規定の関係で、復興の中で回復することができ、その回復された地域の宝がエンジンとなって、復興をさらに進めていく力となる。

この地域の宝は観光の光でもある。地域固有の素晴らしさであり魅力でもあり、復興の推進力にも観光の推進力にもなる。

4. 観光の視点の導入

観光は、他の地域の自然や文物さらには文化に触れて、そこでしか得られない精神的な欲求を満たすことだ、といえる。観光する側については、異なる自然や文物に触れること、観光させる側については、優れた自然や文物を示すことが、観光の成立要件である。いずれにしても、そこに魅力的で人をひきつける自然や文物が存在することが、地域に求められる。被災地では、災害で失われた自然や文物さらには文化の復活や再生がなければ観光は成り立たない。

観光では、風土や風光の魅力が問われる。この風土や風光は、地域の自然資源や文化資源としての、風や土や光のことをいう。この風と土と光によって地域は支えられていて、その風と土と光をもう一度見直すかたちで、地域や復興を考えなければならない。

(1) 観光と3つのエンジン

自然や文化を取り戻すことは、単に観光のためだけではない。地域の精神的な支柱を取り戻すことにつながる。地域の誇りや郷土愛につながり、復興の精神的なエンジンとなる。神楽や獅子舞といった郷土芸能が復興の精神的な支えとなり、復興の地域的な絆となることはよく知られている。美しいまち並みや自然景観の回復は、地域の潤いや歴史的景観の継承につながる。結果として、精神的に豊かな暮らしが実現できる。

他方、自然や文化といった観光資源の回復は、観光客の来訪と地域の賑わいにつながり、経済的な豊かさにもつながる。復興の経済的なエンジンとなる。支援のために被災地に赴くことが観光につながり、観光のために被災地に赴くことが経済的支援につながる。地域の復興には、生業や雇用の確保が欠かせないし、産業復興の推進が欠かせないが、その産業復興の軸になるのが観光産業である。

「被災地責任」という言葉がある。被災地支援に対する恩返しに、災害の体験や教訓を伝える責務を被災地は負っている。その責務を果たすために、伝承

施設や教育施設がつくられる。その代表例が、広島原爆ドームや平和資料館であり、沖縄のひめゆりの塔であり、神戸の「人と防災未来センター」である。そこで、被災地内の人でも被災地外の人でも、災害の体験や減災の心を学ぶ。その学びが、復興や未来創造の力となる。教育的エンジンとなるのだ。

(2) 減災ネットワークの構築

観光を通して、多様で重層的な人のつながりができる。観光を生み出す人と、観光を享受する人、いろんな人たちが力を合わせて観光という1つのものを作りあげていく。それは、地元の人だけではなく、そこに来る人も含めた共同作業である。被災者と支援者あるいは未災者との共同作業でもある。復興というプロセス、観光というプロセス、自立というプロセスがとても大切で、それぞれ文化を作り上げていくプロセスに他ならない。その共同のプロセスと観光は、減災のための人的ネットワークを豊かにすることにつながる。

おわりに

観光という側面から復興のあり方を考え、復興を大きく前に進めることを期待したい。

参考文献・資料

室崎益輝 (2015) : 「復興から見た観光 (招待講演)」第4回 CATS 観光創造研究会, 北海道大学 観光学高等研究センター